



現場で輝く笑顔」

女性獣医師座談会

活躍が期待されている女性獣医師に集ってもらい、産業動物診療の魅力や仕事へのやりがい、農家との関わり方、今後、力を入れたい分野などを話し合ってもらった。獣医学生の半数が女子学生といわれ、産業動物臨床の現場でも女性獣医師の積極的な受け入れが進んできた。一方で、産業動物臨床を志す獣医師の減少や、地域による獣医師の偏在がいわれ、NOSAI団体でも獣医師の確保が課題となっている。そこで、女性の活躍の場としての家畜診療にスポットを当てるとともに、女性獣医師の役割など意見交換してもらった。
(編集部)

出席者
(敬称略)

〈司会〉岩手大学 農学部共同獣医学科 教授 佐藤 繁
北海道ひがし農業共済組合 茅先 史 (共済歴16年)
千葉県農業共済組合連合会 佐藤 真由美 (共済歴 8年)
兵庫県農業共済組合連合会 田畑 卓智 (共済歴 5年)



「月刊NOSAI」
平成30年新年号座談会

「診療の

司会（佐藤教授） 毎日、笑顔で仕事をされている皆さんに集まっていただきまして、新年にふさわしい夢を語っていただきたいと思っていますので、よろしくお願ひします。今、全国のNOSAIの診療所の獣医師が約1700人、そのうち約330人、20%弱が女性獣医師という状況です。NOSAIの現場で多くの女性獣医師が働くようになって30年ぐらいたと思います。もう、女性だから、男性だからといったことが、以前よりはかなり少なくなつて、チームのメンバーとして活躍されていると思います。

昨年、70周年を迎えた農業共済制度ですが、71年、そして80年に向かつて、若い学生さんにも魅力的な職場になるような提言をしていければいいと感じていますので、よろしくお願ひいたします。

まずは自己紹介から。今、どんなところでどんな仕事をしていて、キャリア



北海道ひがし農業共済組合
茅先 史 獣医師

アがどのぐらいか、話していただきましようか。茅先さんからお願ひします。

茅先 北海道・NOSAI道東の釧路中部事業センター標茶家畜診療所に勤務しています。麻布大学出身で、勤続16年目になります。現在、診療所で働く女性スタッフは11人、外勤する技師は獣医師が4人（内1人は育児休業中）、動物看護師が1人です。NOSAI道東は3年前に根室地区と釧路地区が合併した組合で、14のセンター。

け、獣医師176人で診療しています。司会 170人以上の獣医師が働いているということで、さすがに規模がとても大きいですね。では、佐藤さん。

佐藤 ちばNOSAI連の佐藤真由美です。東部家畜診療所夷隅出張所に在籍しています。勤続8年目になります。出身地は神奈川県藤沢市で、日本大学出身です。初任地は北部家畜診療所で、千葉県のほとんどの家畜が集まっているような地域で4年間過ごし

診療所を抱えています。標茶家畜診療所は本部に併設され、往診範囲が市街地から半径30キロくらいで、加入農家が188戸。乳牛が約2万頭と肉用牛が4千頭。馬は57頭で、重挽馬が多いです。組合全体では、約49万頭の家畜を引き受

ました。現在の夷隅地域は4年目になります。現在、その間で産休、育休も取つたので、実質は2年ちよつとです。獣医師が6人、人工授精師が1人、事務員が1人で、事務員は女性ですが、獣医師、人工授精師の中で女性は私だけです。管内の乳牛の飼養頭数は2150ほどで、肥育は81頭です。

司会 多くの府県の典型的な家畜診療所の大きさですよ。では、田畑さん、お願ひします。

田畑 NOSAI兵庫・淡路基幹家畜診療所三原診療所の田畑早智です。勤続5年になります。昨年の3月まで初任地の丹波診療所に4年間勤務して、4月に初めての転勤で淡路島に来ました。丹波診療所は乳牛、繁殖和牛、肥育和牛と、頭数は少ないのですが、バランスよく飼養しているような診療所でしたが、三原診療所のほうは肥育が少なく、乳牛と繁殖和牛がメインになっています。今の診療所は獣医師が7人、事務員が1人で、私を含めて



千葉県農業共済組合連合会
佐藤 真由美 獣医師

2人が女性獣医師です。

司会 ありがとうございます。私も自己紹介をしたいと思います。私はNO SAI宮城で臨床と、ほんの短期間ですが業務をやって、27年ぐらいい世話になりました。たくさんさんの臨床例を見て、多くの農家さんとも付き合わせていただきました。特に農家さんとの付き合いが最高におもしろかったですね。今考えると非常に楽しい時代だったと思います。

大学に移ってからは11年目になります。大学では産業動物内科学、牛の内科を担当しています。特に現場で働く臨床獣医師を育成するというわけではないのですが、牛の臨床のことをちゃんと理解して社会に出てほしいということを入りながら人材教育をやっています。私の研究室は、大動物のフィールドに行く学生が多いので、卒業してからもコンタクトがあつて、いろいろな情報ももらっています。

それぞれの地域で、診療所の状況で話していただきましたが、もう少しお伺いしたい。現在どんな業務、例えば乳牛のこういう診療が多い、こういう病気が増えているとか、実際の業務の話を少し聞きたいと思いますが、今度は田畑さ

んからお願いします。

田畑 気温が下がってきたので、発情がはっきりしてきて、農家さんから人工授精の依頼が増えています。10月、11月は受胎率がいいのではないかと、今、人工授精はかなり頑張っています。夏の分娩になるので、あまりよくないのですが。

司会 やはり暑熱の影響は大きいですか。

田畑 特に乳牛は大きいですね。繁殖成績だけでなく、熱射病もあります。司会 変わった病気とか、新しい知見はありますか。

田畑 兵庫では、尿石症が低月齢化しています。今までは肥育末期で出るような病気だったと、先輩方は言いますが、8カ月、9カ月齢以前の子牛がかかって、手術をすることが時々あります。それは餌のタンパク質と、炭水化物の兼ね合いだったり、よく大きくなるような餌になっているからだと思います。群の中では餌をすぐ



兵庫県農業共済組合連合会
田畑 早智 獣医師

くよくよ食べる、いわゆるいい牛が、ちよつとしたバランスの崩れで尿石症になって、手術をしなければいけない。司会 今までなかったものが新たに出てくるというと、対応は大変ですね。

田畑 持ち帰っていいものなのか、その場で決めなければいけないのかというのがあります。1年目のときは、ひたすら電話をかけて先輩に聞くというパターンが多かったのですが、本当

に急を要するものか、いったん持ち帰って翌日に再診でもいいのかという判断は、今でも迷うときはあります。司会 対応をどうするか、その選択こそが臨床獣医師の一番の鍵ですから、そこは何年キャリアを積んでも難しいところだとは思いますが。佐藤さんは。

佐藤 管内では9割近くが乳牛なので、やはり、夏の暑さが問題になっています。昨年は6月下旬からずっと暑かったと思います。6〜9月に乾乳を迎えていた牛が、産んで次々駄目になるという感じで、9月は本当に事故が多かったです。

司会 やっぱ暑熱ですか。佐藤 毎年のことなので、扇風機を増やしている農家もいますが、経済的に

できない家とか、重い腰が上がらない家はバタバタして「来年こそどうにかしよう」と毎年のように言っています。古くなった扇風機は威力も落ちますし、そのところをちゃんとメンテナンスとか更新をしている家は事故が少ないですね。やっぱり基本的なところが成績に表れていると思います。

司会 北海道では暑熱はありますか。茅先 ありますが年によりまして。昨年は8月に急に暑くなって、あつという間に涼しくなりました。なので、暑くて困ったのは1週間か2週間ぐらい。年によりまして、連日30度を超えるような年もあるので、そのときに熱中症は出ますが、どちらかというと気温のこと、環境のことを言ったら北海道は寒冷です。これから真冬日が連日続きますので、人もしんどいですが、牛もしんどいです。私は今、町営の多和育成牧場を担当しています。そこでは今、感冒の対策に力を入れています。

実習で産業動物臨床への道を決心

司会 生まれが地元というわけではないのですか。

田畑 兵庫県出身なので、NOSAI兵庫を志望しました。学校が北海道だったので、畜産資源という意味では北海道はすごく魅力的でしたが、兵庫も、近畿の中では乳牛や和牛がいる県でしたし、但馬の出身だったので、但馬牛にも小さいころからなじみがありました。

司会 私の研究室の学生に「どうしてそこに就職を決めたのか」と聞くと、やっぱり診療所に実習に行つて、先生方がすごく格好よかった。仕事のスタイルがすごくよかったという人が多いですよ。あの先生のところに行つて働きたいと言う学生が多いですね。学生実習を大切にしてほしいと思います。

学生さんが自分の進路を決めるのは比較的遅い傾向があります。そのときに出会った環境や、出会った先生に対する憧れが強く、獣医の学生さんはすごく純粋です。そのような決め方をさ

司会 NOSAIに行こうと思ったきっかけとか、大動物の臨床をやるうと思つたきっかけを紹介してもらおうと思いますがいかがでしょうか。

田畑 私は、大学4年の冬に行つた産業動物の実習がきっかけになりました。それまでは、いわゆる小動物臨床

の獣医師になりたいと思つていましたが、5年生になって、真剣に将来の就職先のことを考えるようになり、現場を見てみないと分からないので、小動物とか大動物の実習を受けました。実習先のNOSAIでは、女性獣医師の先生がすごく格好よくて、小柄な先生

でしたが、農家さんにも人気があつて、てきばきと仕事をされていて、そのことがあつて大動物臨床を目指すと決めました。あとは性格的にといいますか、車で農家さんのところまで動いていく往診スタイルが自分にぴつたりだと思ひました。



岩手大学 農学部 共同獣医学科
佐藤 繁教授



診療所のスタッフと茅先獣医師＝後列左(上写真も)。「この先も若い人たちが入ってきて『続けていきたい、やりたい』という、意欲を持って選んでもらえる職場にしたい」▶

れる学生は結構いると思います。
佐藤 私は、大学に入るまでは牛を

見たことがなく、もちろん犬、猫の診療に行くつもりでした。大学3年のときに、学年担任の先生に「たぶん向いていると思うから、ちょっと行ってみれば」と言われて、「夏、旅行で沖繩に行くから、行ってみようか」と、NOSAI沖繩の宮古家畜診療所に行きました。その2週間がものすごく楽しくて、「外で体を動かし汗をかく、この仕事は楽しい」と、一気に大動物志望になりました。3年の夏に実習に行っ

てから、私は何カ所か実習に行きました。千葉は北部と南部に行つて、高知や宮崎にも行きました。どこに行つても往診に随行させてもらいましたが、「この仕事は大変だけれども、すごく楽しいよ」と、全員が言っていたのです。それを聞いて「間違いない」と確信して、NOSAIを志望しました。

ちばNOSAI連は研究発表も盛んに行っているので入りたいと思いました。でも千葉は当時、たくさんの方が受けていたので受からないかと思つて

いたのですが、奇跡的に受かることができました。

司会 茅先さんはいかがですか。

茅先 お二人よりも私は世代が上なので、産業動物臨床医の女性の枠がすごく狭い時期のちょうど終わりの世代です。なので、NOSAIはすごく憧れていました。父が病院勤務の臨床検査技師で、その上司に獣医師の方がいました。獣医師の仕事は、家畜に携わる以外にできることが大変多い仕事という認識があります。個人的には、食品に関わる仕事ができる獣医師になりたいと思つていたので、大学入学時から、産業動物か食品衛生の公務員を志望しようと思つていたのですが、そのころはNOSAIでは女性獣医師を募集しないというか、募集はしますが実際に採るのは男性が圧倒的に多い時代でした。記念受験みたいな感じで北海道のNOSAIを受験して奇跡的に受かりました。

その年は北海道内のNOSAIで25

人を選ったのですが、そのうちの5人が女性でした。周囲も採用されたことに驚いていましたが、それ以降の女性採用数が増えた印象があります。今はそれぞれの組合で採用試験をしますが、昔は連合会でまとめて採って組合に振り分けるというスタイルでしたので、引き受け先の組合の女性獣医師に対する考え方とか、受け入れ方がちょうど変わってくる、過渡期だったのかと思っっています。なので、実習も行きましたが、たぶん臨床はできないだろうと思ひながら。

司会 就職の状況を考えるとね。

茅先 そうです。研究室も産業動物内科を専攻していたので、牛の世話をしながら、勉強をしていましたが、就職はそれとはまた別だろうと思っ、県職を受けながら、北海道のNOSA Iだけ記念受験をしました。そうしたら受かりました。

司会 確かに、女性も男性もウエルカムだといひながら、実際の合格者は

男性だったという時代がなかったわけではないですね。ただ、女性獣医師が結果を残してきたことで、全体で2割が女性になってきたという流れがあるので、非常におもしろい話でしたね。

学生時代の話をお伺いしました。さて、大きな夢を持って職場に入りました。現実はいかがでしたか。学生時代に思っていた仕事の内容であったり、職場であったりというのと大きく違っていたか、あるいはほぼ同じだったか。学生時代に思っていたものと実際に仕事に就いて、そのギャップみたいなものがたぶんあると思うので、その辺はどのように感じられたかというのは、ちょっと興味があります。

茅先 経済活動なので、掛けられるものと掛けられないものの現実みたいなものはありました。薬はあるものでやるしかないし、学術的にこういうものがあるといひても、使える薬はここまでしかないとか。大学のように設備も整っていれば、やれることが多いか

もしれないですが、持てる玉が限られながら、それを駆使しながら診療をしていくという制約がありました。また、自分の中で診断、治療、転帰まですべて解決していくのが、実際のところ一番びっくりしたというか、働きだしてからすぐ責任を感じる部分です。

司会 学生時代に実習でやっていた診療と、制度上の一定の決まりの中でやる診療との違いというのは、初めて知ったことだし、学生時代はもちろん知らなかったということですよ。

佐藤 私は学生のとときに思ひ描いていたのと、そんなに差はありませんでした。このような生活スタイル、こういう仕事なのだろうと思ひまま、今もやっていると思ひます。初任地に恵まれていたと今では思ひますが、結構、自由に何でもやらせてくれる上司と全て受け入れてくれる農家さんというか、新人を育ててくれる農家さんに助けられたと思ひています。「思ひっ切りやっていいよ」とよく言われていましたし、



NOSAIを志望したのは学生時代に行った実習がきっかけと佐藤獣医師。「何力所か実習に行ったが、どこに行っても『この仕事は大変だけれども、すごく楽しいよ』と聞き『間違いない』と確信しました」

上司もよくカバーしてくれたり、研究発表も好きにさせてくれたり、でも、すぐくフォローもしていただいて、初任地の4年間は充実していたと思います。

初任地は、千葉県にしては規模が大

きい酪農地帯で、頭数も多かったですし、見切りも早い地域でした。今、転勤をして1戸当たりの頭数がすごく小さい地域になって、また共進会がすごく盛んな地域というので、農家の価値観が全く変わったときに苦勞しました。転勤したことで、就職をして初めて苦勞したかなと。だいぶ慣れてきました。

司会 ベテランの獣医師が、転勤は大変だけれども、悪いことだけではないよと、よく言いますね。

佐藤 やっぱり一皮むけるといいうか少し大きくなれたかと思えます。

司会 今までと違う環境で、違う患者を診ることによって、ものの見方や考え方が変わる方が多いし、それを狙っているという部分もあると思う。転勤があるなんて学生時代は想像もしない？

佐藤 聞いていたので、次はどこかと思っていました。

田畑 私は実習先の獣医師に憧れてNOSAIを選びましたが、実習中に「あの牛、よくなつたわ、先生、ありがとう」という農家さんの声を聞いて、臨床獣医師は「治してなんぼ」という気持ちで入りました。それは間違いないと思いますが、どんな牛でも、時間がかかっても治すイメージでしたが、現場では必ずしもそうではないと。

最初のころ、先輩や上司に「この牛、いつまで診ているんだ。いつまで診るつもりなんだ。農家さんとちゃんと話をしたのか」というのを、よく言われました。新人がやっているのを農家さんは温かく見守ってくれたのだろうと感謝でしかないので、上司に、この牛は治るのか、治らないのか、お金と時間をかけて治すべき牛なのかどうか、総合的な判断をしないと教えられませんでした。「治す」だけでは駄目といえますか、予後判定の精度というか、そういう意味ではすごく衝撃的でした。

あとは臨床獣医師になりたいと思っ
て入って、保険手続きとかカルテとか、
机に向かう時間も結構長いというのが、
イメージと違いました。

司会 学生時代に大動物の臨床を希
望している学生は、一生懸命勉強しま
すよ。教科書にはこういうふうにする
ば診断ができます、治りますと書いて
ある。だから、全部治るものだろうと

子供を通して地域社会の一員に

司会 さて、職場でそれなりに仕事
をやるようになってきて、ベテラン
であったり、中堅であったりという立
場になってきているのだろうと思いま
す。世の中全体として、あるいは皆さ
んが所属している家畜診療所として女
性獣医師だからどうか、今はない
のだと思います。でも、難産や子宮捻
転など、どうしても力を使う、あるい

思っ、現場に行くけれども、実はそ
うはいかない。そんなものだよと上司
の人が言ってくれるかもしれない。け
れども、それは本当に科学なのですか
と言いたくなるときもありますね。そ
れから、事務仕事があったとは想像も
しなかったというのは、学生の時には
見えない部分ですね。

は持続的に体力を使うという仕事もあ
る。獣医師として仕事をやっていく上
で、こんなところが大変だと感じてい
ることはあると思うので、その辺を少
しお話ししていただければと思います。
茅先 まず、体力的なハンデは、
あまり感じません。重機をお持ちの農
家さんが多いですから、子宮捻転のと
きの母体回転法なども、ほとんど重機

で転がします。子宮捻転棒という道具
も、結構ポピュラーに使ってしまって、
子牛の足に引っ掛けて、てこの原理で
回すという道具を1人1本持っていま
す。むしろ、体力を過信して力でやろ
うとする方は、腰を悪くしています。
女性スタッフで腰をやったという人は
あまり聞かない。長く走り続けるなら、
男性であろうと、女性であろうと体は
無理しなくてもいいと思っています。

仕事の向き不向きは、性別ではなくて
性格ではないかと考えています。男性
で細かいことにとらわれて前に進めな
い人もいますし、女性でもズバツと切
るときは切るみたいなのももちろんい
るし、それは個性だと思います。

ただ、女性が男性と大きな違いがあ
るとしたら、妊娠、出産をするという
ことです。それをどのように周囲、ス
タッフが関わっていくのかというのが、
課題かとは思っています。私は子供が
3人いますが、産んで、育ててという

のを自分でやってみて、そんなにダメリットだったと思っていません。子供を通して地域社会と関わることで、農家さんとの付き合い方も変わりました。子供を育てていると、その地区の人になりますから。仮に転勤があっても、子供がいて、ここに暮らしているというだけで、外様だった自分たちが地域の一員として見てもらえるようになったと思います。

家畜に対して、生産獣医療なので、多くの家畜が雌です。なので、同じ女性としてすごく共感する部分、尊敬する部分というものもありますし、命の不思議であつたりとか、そういうものに真摯まじに向き合うきっかけになると自分では思います。

司会 われわれはどうしても、女性であるがゆえに体力の部分で大変だろうと思っっているけれど、工夫をするところで、機械を使ってもできるわけだ

から、問題は全くないというご意見です。

茅先 農家さんにやってもらうこともあります。「ここは取れないけれども、ここをやって」と言っ

司会 指示というか指導してやってくれる？

茅先 指示をする立場でもあると上司にも言われたので、「獣医師は基本的に指示をする立場でもあるから」。

なので、自分で手に負えないと思ったときに、あと5分5分というところを農家さんにやってもらうこともありますし、それを恥ずかしいと思うよりも、できることをちゃんとやると考えます。

司会 すばらしい。

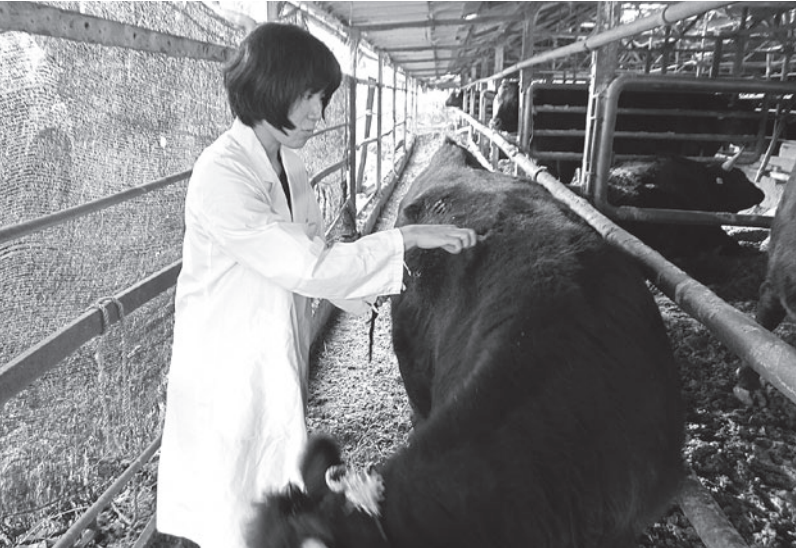
茅先 自分ひとりでできることには限りがあります。男性の方で腕が太いと直腸検査するのに苦しいとも聞きませし、それは個性だと思っ

司会 女性だから大変だよというこ

とは、基本的に業務の中ではないということですね。私らみたいに古い時代に臨床獣医師をやった者は、力もないのにあるふりをして、機械を使わずに大きな声を出して一生懸命、難産を処置するという美学がありました。これも通じなくなってきましたね。

すごく印象的だったのが、出産をした後に地域のコミュニティの中に入っていくことができたという話です。臨床獣医師は地域のためにやっているのに外様と見られる場合もありますよね。でも、子供ができて地域のコミュニティと交流することで、この地域に根差した人なのだと見られることは、これはとても大きいですよ。それを感じていらつしゃる、私自身としては初めてお伺いしたことですね。これは勉強になります。

佐藤 私も体力的なもの、機械などで解決できていると思っ



勤続5年で昨年4月に初めての転勤を経験したという田畑獣医師。「人と人のつながりがあり、牛がその間にいるということをもものすごく感じています」

は私自身、身長は160センチありますが、手が短めのところがあって、お産はいつも不安です。この間も難産を回復するのに、手がどうしても足にかからなくて、私と同じ身長 of 男性の先生と2

人で行ったけれども、2人とも届かなかったのです。だから、それは男女差ではないと思って、そこで身長180センチで、すごく細くて手が長い男性獣医師を呼んだらすぐできたというのもあるので、男女差ではなく、

そこもチームワークなり、やせて手が長い農家さんだったら農家さんにお願ひしたり、いくらでも解決できると私も思っていました。

これは人それぞれだと思えますが、やっぱり女性のほうがコミュニケーション能力がちよつと高い人が多いのではないかなとは思っています。農家さんはお父さんもお母さんとも結構お話し好きな方が多いと思うので、特に農家の

お母さんなどは、1軒行って、治療は10分で終わったけれども、その後30分しゃべることも多いと思います。そういう世間話の中から今後の暑熱対策とか重要な話も交えていけるので、その入込みやすさがあります。男の人でもしゃべるのが上手な方もいるので、ここもやっぱり個性だとは思いますが、でも、女性のほうが得意な人の割合は多いのではないかと、ちよつと思えます。

あと、私自身、出産をして、母乳育児をして、初めて乳房炎の気持ちがかかりました。私は、それまで全く分かっていなかった。ただ、「腫脹して、硬結して、熱発して、餌を食わないのだ」ぐらいだったのが、「それは食わないよ」というのがすごく分かりました。

茅先 大変だよな。

佐藤 気が遠くなりますよ。

茅先 本当に苦しい。座布団という

か石みたいになる。

佐藤 何もできないというのがすごくよく分かるし、陣痛もそうですし。前は「乳房炎です」「抗生物質ね」と思っただけでも、今は「痛いね」と。

司会 そこが農家さんに理解してもらえない部分ですよ。自分の大切な牛をそういうふうに診てもらえるから、女性獣医師はいいと農家の人は思ってくれるはず。

佐藤 農家の奥さんは「痛そうなのよ」と、そこで「痛そうですね」と、すごく共感できるようにしました。

司会 それもコミュニケーションですね。自分が変わったがためにコミュニケーションのステップが一つ上になったのかもしれない。これは、またいい話ですね。コミュニケーションの能力はとても重要で、大学でも何とかその教育をしたと思うのですが難しいですね。なかなかうまく教えない。われわれに力がないのかもしれない。

れないけれども、コミュニケーション能力を育てることは難しいですね。でも、特段、立派な話をするのではなくて、お茶を飲んで農家の方のお話を聞

世代による女性獣医師観の違い

く、差し当たりはそれでいいのだと思います。女性のほうが、それを上手にできる人が多いのかと、それは私も同感ですね。

田畑 農家さんによつては、やっぱり女の人イコール力がないイコール不安ということを感じています。年配の農家の方を相手にするときに、そういう不安要素を与えているというか、「先生、お産は大丈夫なのか」と言われたときに、そこをうまく笑い話に、冗談でもいいのですが、安心させられることができればと思います。実際、お産でも、力づくで無理やり出した牛の産後がいいか悪いかといったら、悪いことが多いと思うのです。本当に怪力が必要な仕事はあまりないというのは感じます。そうなつてくると、女の人、

男の人というより、性格というか、牛が好きでも好きな人が向いているのかと。牛ばかり見ている、牛はよくならないと思うので、人を見て、人とならぬ人というか、人を好きでなしやべれる人というか、人を好きでないというまじいかなと思います。

女性、女性と言われて、それをコンプレックスに感じたことがないといつたら、私はうそになると思います。でも、いい時代というか、直近の先輩も女性がいまして、後輩も毎年、女性が入っているのです、すごくいい時代に就職できたとは思っています。

司会 田畑さんは女性というより

も、力とか体力などの部分で少し不安を感じるということですね。特に年配の方は、不安に感じていることもあるかもしれません。地域によってどうですか。転勤されて、地域による違いはありますか。たぶんそれは女性獣医師と飼い主さんがどのぐらいの期間付き合ってきたかという歴史だと思うけれど、その辺はどう感じますか。

田畑 初赴任地であった丹波ではどちらかというところ、そういう思いはあまりしなかったというか、そういうことも考えずに猪突猛進でやっていたのかもしれないですが、兵庫県でも丹波は北部のほうで、今いる三原は一番南になる。そういうので地域性も違うのかなとは思いますが、「力はないけれども、大丈夫か」と心配されていると感じることは多いようには思いますね。地域によって、女性獣医師に慣れている、慣れていないというのものもあるのかもしれないです。

司会 お2人の話を聞いてアドバイスをしてあげてください。

茅先 私たちの組合の診療所は僻地診療所を抱えているので、そういうところに応援で行きますが、その農家さんが来て、30歳ぐらい先から二度見をされた後に、大声で「女？」と言われて、「女です」みたいな。そういうふうには慣れないという人もまだいますが、仕事に対しては、同じことをしていくので、「ちゃんとやるんだね」みたいな感じで受け入れてくださる方、そちらのほうが多いかと思えます。

膿瘍の切開などをしたりすると、「あの人、ズバツと切っていった」「すげえな、女」と言われて帰ってきたりもします。たぶん偏在しているものと、あとは慣れというものがあるのかと思います。女性の社会進出が法律で定められてからの歴史がまだ浅く、年配の方は、女性は弱くて、守ってあげ

なければいけないというふうにも思っている方々がやっぱりいます。こちらは普通に仕事をしようと思っただけなのに、「女のくせに」みたいな対応をされることもあります。そういう方はよくよく考えてみると、まだ勤労婦人福祉法の1972年のときの法律の世代の方々です。

あの法律は、女性は体力的にも思想的にも弱い、男性に劣るといふふうの文言で書き表しているわけではないのですが、暗に示している法律なので、だから女性は守ってあげなければいけないから、分娩をするときは休ませてあげなさいとか、そのように書いてあります。平等の先駆けになっている法律でさえ、まだ本当の平等ではなかった。私が大学を出る直前に男女雇用機会均等法が改正されて、その時点でやっと男女の差別というものをブラッシュアップして平等だといふふうにしていくのですが、それもまだ不完全

だった。2006年でまた改正されて、現行法になっていますが、歴史としては、まだ枠組みが浅いのです。

なので、世代間による意識の差はすごく感じます。やっぱりそれは実際そこにいる人たちが対応するしかないで、慣れていけば変わっていくし、世代が移り変わっていけば、そんなことは何もない、感じられない世界にきつくなっていくのだろうと思います。

司会 法律の問題はもちろんあるけれども、その時代の人たちの意識というかジェネレーションが変化していくことによって、いろいろなことが当たり前になっていく。今、まさにその移行期ですよ。NOSAIに入ってから、そんなに時間がたっていない多くの若い方々は、先ほど田畑さんが言われたように、実際は心配しているところがあると思います。その辺に対するコメントをいただけませんか。どうやったらブリークスルーができるのか、そん

なことは気にするとか、もっと気にしろとか。

佐藤 私も、お産に行くときに怖いみたいなのが初めはすごくありました。が、滑車を引つ張るのも畜主さんだし、こっちはガイドをすることがメインだったりもするし、問題はないかと思えます。あとは蹄病治療ですかね。蹄病治療で蹄を上げるのもやってくれる人がいるし、農家さんが足まで上げてくれる人もいれば、枠まで入れて、はい、お願いという人もいるので、実際、私の後輩でも、すごく細くて自分で蹄が上げられない子も確かにいます。そこも滑車を使えばいい話なので、いろ

いろ工夫はできると思います。

司会 特に力が必要な診療行為に関しては、道具を上手に使うことを覚えていけば良いということですね。

佐藤 だんだんに、「そんなに力は使わないのだ」となるのではないですかね。でも、今でもいろいろ不安ですが、お産だと言われるときは。

司会 それは女性、男性は関係ないし、キャリアの差も関係ないと思います。

茅先 大変な仕事になるかもしれないからですね。

佐藤 そうですね。難産は二つの命を扱う大切な仕事ですからね。

産休・育休後の仕事の不安

司会 今までの話で先輩に対する質問はありますか。

田畑 産休を取る、育休を取ると

なったときに、絶対に不安だと思うのです。私はまだ経験をしていないので、全く想像もつかないのです。なので、

今、連休があつて、現場をちよつと離れるだけでも不安になるといいますか、「帰ったときにちゃんと妊娠鑑定ができるのだろうか」と思います。NOS AI兵庫でも、2人の女性獣医師が産休、育休を今、取っていますが、産休、育休とかを実際に取られて、そこに不安とかはありませんでしたか？ もちろん周囲のサポートありきだろうと思いますが、復帰するときはどうだったとか、復帰したあと、どうだったかというのを教えていただきたいと思いません。

司会 正直な質問だと思えます。

茅先 私は3人を産んでいると言いましたが、組合としては、旧釧路のときに14年ぶりに女性獣医師を採った2人目です。先の方はもう辞めています。だから、周りも物珍しかった。深夜業をできるようにしてから女性獣医師の採用は私が1人目。その前任の方は深夜業ができなかった、法律的にま

だ認められていなかったのです。深夜業ができるようになってからという点でいくと1人目で、産んで復職させるまでというのがみんなの中で目標があつて、自分の中でも目標だったというのがありますが、最初の妊娠のときに化学流産をしているのです。それは確率的なものです。周りも怖い。自分も初めてで少なからずショックだった。

それを忘れるか忘れないかぐらいのときにすぐ妊娠をしたので、すぐ内勤になりました。4年目の途中だったけれども、ほぼ2年内勤をして、2人目を産んだあとに内勤をする場所に帰るよというはずでしたが、組合の事情があつて、外勤を日勤だけすることになりました。そのまま臨床、結局外勤のほうに移っていくのですが、1年と少したった時点で、また3人目を妊娠してしまつて、実際に外勤をしていた時期が勤続年数のわりには、私は少ない

ほうだと思えます。

それはある意味、恵まれていたのかもしれないのですが、そのせいで外勤をしていた期間が自分の後輩たちよりも少なくなつていくという焦りは後々出てきます。最後に育休を取ったときの制度が旧釧路組合の制度で、最長5年取れるという育児休業制度がありました。それが、それを途中で切り上げて復帰しました。でも、離れたら、結局、自分の代わりはいます。チーム診療なので、自分の代わりがない仕事はないです。

それを自分がどこまで受け止められるか。子供とどうやって向き合っていくのか。産まれてきた子供が健常の子供でなければ、私は仕事を辞めていたと思えますし、家庭の事情がすごくあると思うので、事情に対して何か変化を求められるとしたら、断然、女性のほうが男性より多いと思います。なので、もう少し振り幅のあるような世の

中になっていくといいだろうと思いましたが。

司会 本人の気持ちと、あとは組織としての支援ですね。

茅先 そうですね、組合としては、当番に出られないような獣医師は、正直、いても困るといのが、そのときは本心としてはあったと思います。だから休みを長く取っていますが、今、これからは女性スタッフが2〜3割になってきて、3割を占めるような組合とか診療所もあると聞いていますので、働き方の多様性みたいなものを周囲が理解しないと共存できないというか、獣医師の数が足りないですね。

司会 田畑さんの不安に何かアドバイスをしてあげてください。

佐藤 うちも兵庫と同じような感じなのではないかと思いますが、産休に入るからといって、部署が変わって、例えば妊娠して内勤部署に移れるとか、

そこからはかの獣医師が来るとかはないので。その分、一応内勤にはなりますが、全員分のカルテの処理だったり、事務処理をするということで、少しでも外を回っている人の負担を軽くするという形です。タイミングがよければ、産休に入るときに定年した人が近くにいると、その人が来てくれたり。でも、そういう人たちが近くに住んでいなかったりすると、結局、いない期間は1人減のまま、ということになります。千葉県は子供を産んでいる人が多く、30代、40代、50代、孫がいる人、女性の管理職もいます。女性の管理職がいると妊娠をしたときはすごく相談しやすいですね。いないと、これだけ産んでいる千葉県でもやっぱり言い出しづらいです。

それとは別に復帰したときの不安がすごくありました。結局、妊娠して、内勤をした期間と産休、育休を合わせ

ると、1年半、現場に出ていないので、筋肉注射もできるかとすごく不安でした。1年目のときに1回、筋肉注射で頭を蹴られたことがあって、それが結構トラウマで、筋肉注射はすごく怖かったですね。筋肉注射もできるかと、第四胃変位はもつとで、直腸検査も分かるかと、初日はすごく不安の塊で、新人のような感じで、診療所でも一から出直すつもりで頑張りますと言って。

私は5年目で妊娠したのですが、5年やっていると意外と体は覚えているもので、第四胃変位も初めは誰かと一緒にやろうと思いましたが、1回、夜間当番のときに右の第四胃変位が入ってしまったって、それが産後1発目で、すごく不安でしたが、夜11時ぐらいでしたし、誰も呼べないし。呼んだら来てくれたかもしれないけれども、あまり呼びたくもなくて、やるしかないと思ってやると、結び方は意外と体が覚えて

いると思いました。やっぱり直腸検査の精度は少し落ちるかなというところはエコーでカバーしています。本当は手だけで分かることもエコーを使ったり、あとは黄体もエコーで確認をしたりとか。でも、すごく不安、それは全員そうだと思います。でも意外と体は覚えていきます。

司会 そのとおりだと思います。絶対不安がありますよね。でも、やるしかないし、結構、1週間ぐらいで。

佐藤 1週間ぐらいで、そうですね。

司会 私も業務に1年半いて、現場に戻ったとき、牛を触りながら腰が引けているのが自分で分かりました。これはおかしいと思って。そのぐらいの感覚だと思えますよ。

佐藤 まず、牛舎に行つて「わあ、牛だ」と思いました。

司会 今の先輩のお話は、もちろん実際は不安もあるけどすぐ慣れてしま

うよ、やるしかないよという話でしたね。私らは想像ですが、出産するということは、普段の業務、給料をもらつて仕事をしていることは全く次元の違う話のような気がします。女性として出産をされることと業務との関係は、横並びではないと思います。業務とう

かゆいところに手が届く獣医師に

司会 今までの話で、女性獣医師だからとか、男性獣医師だからという議論はもういいでしょう。次に臨床獣医師として、今それぞれの職種で働いて、やりたいこと、こんな仕事をしてみたい、こんな勉強をしてみたい、あるいは業務の中でこういう技術を開発して、こんなことをやりたいと思うことをお伺いしたい。

まいこと兼ね合わせができるかな、ほかの人に迷惑を掛けてしまうのかな、そういうことは考えなくていいのではないかと思えます。良い話をうかがいました。すごく掘り下げた感じがしますね。よく理解できました。

田畑 この職に入ってから上司や先輩の獣医師の方を見ていて、どういう獣医師になりたいかといったら、やっぱり農家さんのかゆいところに手が届く獣医師です。われわれが呼ばれるときは悪いとき。人工授精とか妊娠鑑定でプラスだとうれしいですが、だいたいの病気があるとか乳房炎がある、難産がある、風邪をひいた、下痢をしてい

る。マイナスのときが主だと思えます。そういうところを一緒に乗りきれ、それと、例えば「こういうのを悩んでいるのだけれども」と言われたときに、それは新しい技術とか大学で習ってきたところでもあると思いますが、力添え、お手伝いができるような獣医師になりたいと思います。

もちろん獣医師なので獣医学が大前提で、この病気はこれで治る。ケトシスはブドウ糖を注射すれば治るとか、熱があつて乳房炎だつたら抗生物質を打つたら治る。そういう薬の選択とか、処置の仕方は重要だと思えますが、やっぱり酪農学や畜産学、農家さんの仕事を知る必要もあると。私も初任地では、一番下か、一番下から2番目みたいな形で、父親と同じ年ぐらいの上司がいる年齢構成でしたが、今の診療所に来て、一気に後輩が3人できてしまつて、新人の教育係を任せられてい

ます。そうになると、「どのような獣医師になりたいのか」をあらためて考えるようになったといえますか、本当にいい意味で初心に戻らせてもらったと思えます。

獣医学、新しい治療法を知ることとは大前提で、治せなかったものを治せるというのは、今でも目標ではありませんが、それとはまた別で、子牛市場のことを知る、餌のことを知る、乳価のことを知る、そういう知識を持つていけば、かゆいところに手が届く獣医師になれるのかと、獣医療以外の面でもお手伝いができるのではないのかなとは思っています。

司会 よく理解できます。獣医学的な知識、技術はもちろんだけでも、もっと幅広くいろいろなことを知っていて、総論ではなくて各論として、その農家さんに一番必要なものを情報として提供する。そういうことができる

ようになりたいというのは大切で、やらなければいけないですよ。

私も授業で学生に対して、国家資格を持つて先生と呼ばれる立場で農家さんのところに行くのだから、しっかりと勉強するように言っています。要するに大学で習ったこと以外にも、毎日勉強して、先生と呼ばれるのに恥ずかしくないようになって仕事に行かなければ駄目だよと。もう一つは飼い主の方々は、人間を見る目がすごいのだよということ私は学生に言っています。すなわち、獣医師がその農家のために一生懸命やっているかどうかというのは、農家さんはすぐ分かるのだよと。いくら偉そうなことを言っても、表面的であつたり、内容が伴っていないければ、農家さんは信頼してくれない、ということですよ。農家さんをかなりリスペクトしていかないと、話もなかなか聞いてくれない。

佐藤 私が今、興味を持っていることは採卵で、私が前にいた北総地域は、ほとんどの乳牛が北海道からの導入牛で、だいたい黒毛和種を付けてF1、今は和牛の子牛の価格もだいぶ下がってきましたが、いつときすぎい値だったので、F1にとどまらず、今はほとんどが和牛の受精卵を入れているという状況になっています。

和牛繁殖農家の方と採卵をして、その卵を周りの酪農家につけるといこうとをやっています。受胎保証でやっているのですが、両方ウインウインの関係かなというのを。今、千葉県の一番南の安房の地域は高齢化がすごく進んで、乳が搾れない状況になってきているので、和牛への移行が進んでいて、そこでも採卵を始めています。

私がある夷隅地域は、北総地帯、安房地域のちょうど中間です。だいぶ高齢化が進んでいるのに、みんな、まだ

ホルスタインを飼養していて、搾るのが好きなので、でも、後継者もないんですし、朝、夕、搾るのも大変になってきているから、その地域をいかに和牛にうまく変えていくか考えています。またホルスタインを続けている地域も、何となく種を付けて後継牛を残しているのではなくて、いい牛だけを残すようにしないと、この先やっけないと思うのです。

うちの地域はホルスタインの採卵もやっていますし、それは、今は共進会の好きな人が共進会用の卵ばかりを採っています。そうではなく、一般の農家でも、その家の一番能力の高い牛の卵をどんどん残すことをやっていきたいと思っています。ただ、和牛の採卵とホルスタインの採卵は全く違うと思っています。なかなかうまく採れなかったり、そこは餌の管理だと思おうで、その辺を勉強していきたいと思っ

ています。

司会 いわゆる中堅の先生といわれるキャリアを積んできて、個体診療はもちろん農家の経営のために役に立つけれども、別な分野でもお役に立ちたいということで、今は受精卵の移植もされている。

佐藤 はい、やっています。

司会 次のステップに農家を仕向けたいということ。

佐藤 この先、1人で2回搾っているのか、続けるなら繁殖和牛がいいのではないかと。でもそれにシフトするには、70歳近くになってからではもう遅いので、60代前半ぐらいから少しずつ始めていきたいと思います。

司会 NOSAIの診療所の先生方の言うことを、農家さんは聞いてくれるので。

畜産への貢献で地域に恩返し

茅先 普段からの酪農家のところに

一番入り込んでいる関係機関の一つがNOSAIだと思っています。営農に関しては、農協の営農部がありますので、そちらの人との連携がとても重要になってくると思いますが、やっぱり離農はうちの地区にもあります。高齢化も進んでいますし、後継者がいるところは、それだけでも営農の8割、9割が成功といわれているので、それがないうという時点で、じゃあ、いかに閉じていくのかを私たちも意識することがあります。決してマイナスにはならない時点で、パンクしてしまうみたいにやめることがないように、皆さんが円満に牧場を閉じられるように導くというのもわれわれの仕事なのかと思っ

ています。

育成農家でしたが、ご病気で続けていくのも厳しいという方と、たまたま話をして、誰もそれに気付いていなかったことがありました。すぐ上司に報告して、その日に営農の担当の方に行ってもらって、じゃあ、販売の計画を立ててもらって、着々と販売をさせて、種が付いているものはそれでよし。付いていなければ、いついつまでというふうにして、閉じたということがありました。牧場を見届けるという意味で、一番近い存在にいる私たちもセーフティーネットになりうるというのを常に意識しています。

あとこれから力を入れていきたい分野ですが、特別、とりわけてすごい特

徴が私にあるわけではないのですが、これから返していきたい。自分が学ばせていただいて、育てていただいた地域に返していきたいというところで、勉強会を設けたりする機会が最近、多いです。たまたますぐそばにいる上司、先輩にそういうのにすごく熱心な方がいて、今年の4月から発足しましたが、農業指導員を中心に「女性カレッジ」をつくりました。町内の農家を対象に、年齢や道内外の出身に関係なく学びたい女性を集めて勉強会をするというのを、この11月で4回までやりました。

本来に普通のことですが、子牛の管理とか、病気、あとは乾乳期管理まで、視察なども入れながら取り組んでいます。なかなか、女性を対象にして勉強会をしようと言っても、だんなさんに遠慮したりとか、子育て中で外に出られないとか、今までそういうハードルがありました。NOSAIが講師を

出し、町と農協、技術者連合という形で、普及員、普及所など、関係機関に全部総出で協力していただいて託児所を設けながら、勉強会をやっています。これから進めていきたいと私は思います。

仕事としては、どんどん新しい技術を取り入れていくのは個人としては当たり前前だと思いますが、後任とか、若手を育てたりとか、世代が変わっていく農家さんのニーズに対応した啓蒙とか、互いに理解を深める場を持つことで、牛の生理と実際の技術の間を取り持つ機会をもっと設けていきたいと思っています。

司会 ありがとうございます。3人の先生方に共通しているのは、農家さんのために何ができるだろうか。できることをやってあげたいということを確認に意識されているのは、さすがだと思いますね。さて、今やりたいこと

を話していただきましたが、次に、普段の業務をやりながらですから難しいところもあるとは思いますが、どうすれば、今話していただいたやりたいことがやりやすくなるかということをお話していただきたいのですが、もっと大きな話で、今考えていることができるようになったらこんな地域になるよということまで含めて、新年の座談会ですから、大きな夢の話をしていただくかと思いますが、田畑さんどうですか。

田畑 人と人のつながりがあり、牛がその間にいるということ、短い5年ですがすごく感じています。ですから、先ほど茅先先生のおっしゃっていた勉強会は、いいなと思います。地域のみんなで、牛に携わる、携わらない人も含めて、総動員でやっていけるような体制というか、その中にNOSA Iももちろんあって、というふうにな

れたら理想ですね。兵庫も本当に高齢化が進んで、特に乳牛はほとんど減っている状況なので。頭数の減少、戸数の減少は止められないと思いますが、そういうのを全部、地域のみんなでサポートしていけるようになったらすごくいいなと思います。自分たちの仕事に、さらにやりがいが出るではないですが、獣医師であり、NOSA Iであり、地域の人間であるというか。

最初の3、4年を過ごしたところは、どうしても離れてしまうというか、転勤で全く別のところに行ってしまうかもしれないのですが、私が4年過ごした丹波には、農家さんとのつながりができて、今でも遊びにいくという縁があります。こちらから、今の三原の現状で伝えられることもありますし、逆に丹波の農家さんに聞いて勉強させていただきますこともあるので、そういう目で見たら、地域全体、兵庫全体となった

ら日本全体なのかもしれないですが。

司会 個人としてできることはあまりないのだと思いますが、でも、個人が中心になって、関連の組織と連携したり、地域を、兵庫県を、日本をというのではある可能性があるので、田畑先生が言うように、獣医師としての技術をベースにして関係団体と連携して、最終的に農家のために何ができるのかというのを考えて行動していくのは絶対に大切ですよ。私も同感です。

佐藤 やっぱり突き詰めるところ、農家の利益を少しでも上げるといのが全国各地でも同じ目標だと思います。そのための採卵であったり、そのための飼養管理、あとは農家の教育もあると思いますが、どうしても後追いの治療になっている、それに追われている現状があるのは確かだと思います。後追えばかりになるのではなく、先を行く、農家の利益を追求して、少しでも

もうけさせるといふのを常に念頭に置いて仕事を毎日積み重ねていかなければいけないとは思っています。

司会 われわれの仕事は本当に重要ですよね。何度も言いますが、農家さんにとって、そういうふうが一番の相談相手にならなければいけないと思います。

茅先 女性カレッジは、今、私の中では重要というか、事務局として充実にしてやらせていただいでいて、うちの診療所の主に女性獣医師が講師になって、ここ4回まで来て、女性のための女性による。男性が講師になっていいのですが、基本的に女性による勉強会として実現できているので、それをどんどん発展させていくというのが当面の目標です。

地域の産業として、標茶町の中では酪農がとても大きいところを占めています。多和育成牧場の存在もそうです

が、酪農業をより身近に感じてもらう、知ってもらえる取り組みを継続していくことが大切だと思います。酪農業にもっと興味を持ってもらって、どういう産業なのか、地域の人がそれに期待できる、夢を持って見られるようなそういう場所に、標茶にいる限りはそれを町のためにやらせていただきたい。

もちろん転勤がありますので、転勤をしたら、その先でまたきつと同じようなことをやると思いますが、そのためにいつも心掛けていることが、佐藤教授もおっしゃっていたのですが、人を尊敬しながら仕事をするということです。私の上司もすごく人を尊敬して仕事をされていて、人の失敗でさえ、それに敬意を払うという姿勢を持っていて、その人が私の目標です。普段出入りしている農場の失敗例を目にしたがら、そこから逆にそこに向かって改

善していくことができるのも私たちの仕事だと思えます。それは例えば哺乳技術、飼養管理とか、繁殖にしてもいろいろなアプローチの仕方があると思いますが、必ず検診をやらなければいけないのかどうかというのは、また農家によって違うと思う。私はやっぱり

管理技術の中に繁殖、発情を見抜くという技術もあると思うので、それができる人はちゃんとそれに徹底していただく。いろいろなアプローチがあつていいと思いますが、それをすべて尊敬しながら、私たちがも診療に向き合いたいと思つています。

若い人たちに選んでもらえる職場に

司会 ありがとうございます。きょうは、診療の現場で笑顔で働いている先生方に来ていただいて、より多くの先生方が笑顔で働けるようにするにはどうしたらいいだろうかという壮大なテーマで進めてきました。話の最初のほうでは、女性獣医師としての特徴とか、あるいは大変なことということでお話をしましたが、確かに新卒でNOSA Iに入つてすぐの時期は、もちろ

んいろいろな不安がある。でも、それは別に女性獣医師だからということではないのかもしれないですね。いろいろな症例を重ね、キャリアを重ねていく間に、例えば筋肉の力や体力がそんなになくても、大きな問題にはならない。協力してくれる方々、あるいは上手に指導することによって女性であることのデメリットはほとんどないのではないだろうかというお話もありま

した。

むしろ女性としての特性を生かして農家さんと話をしたりというところは、メリットの部分かもしれない。いずれにしても究極的にはNOSA Iで家畜診療をやっていく上では、男性も女性も特段、差がないのではないだろうか。そういう中で自分たちがこれから農家さんのために何をやりたいか、そのためにはどうやっていくかという話を最後のほうでしていただきました。

女性、男性の差はないのだよと言いつつながら、やっぱり働きやすい職場をつくっていくという点では同僚であつたり、上司であつたり、あるいはその上の体制を整える方々の理解は絶対に必要になってきますね。確かに畜産全体としては厳しい状況で、どんどん飼養頭数、飼養戸数が減っているような状況の中で、それでもNOSA Iとして農家さんを支援していくという業務の

大切さは変わらないので、そういうふうに皆さん、進んでいっていただけると思います。きょう、3名の先生方から力強いご意見をいただいて、私もそのように感じました。

最後になりますが、全国の若い先生方、男性でも女性でもいいけれども、NOSAIの先生方あるいは学生さん、これから将来、何をしようかと考えている学生さんに向けてメッセージをぜひ、お願いしたいと思います。それできょうを締めようかと思っています。どなたからでも結構です。お話しください。

田畑 仕事に携わっている時間といたら、1週間の中でもかなり長いと思います。1週間の中と変わらず、一生の中でこのままずっと仕事を続けていくのであれば、どんな職場であつても、産業動物獣医師であつても、そうでなくても、獣医師であつても、そうでなくても、仕事の時間がたぶんおそ

らく一番人生で長いのではないのかと思います。それがちょっとでも楽しいとか、自分に合っているという仕事であればいいと思います。自分がこの仕事をさせてもらつて、もちろん楽しいことばかりではないですし、しんどいとかつらいというのがありますが、楽しい仕事、やりがいのある仕事を選んだほうが得なのではないかと思うので、そういう仕事をすぐ選べなくてもいいので見つけられればいいかと思えます。

佐藤 私もそうだったように、特に日大などは牧場実習も必須ではないです。NOSAI実習ももちろん必須ではないので、全くこの世界を知らないまま卒業していく人はかなりの人数がいると思います。なので、学生時代しかむしろ知ることができないと思つて、一度でいいから、この世界を見た方がいいと思います。私もそうしなかつたら、たぶん人生は全く違つていたで

しょうから。一度でいいので、実習を経験できたらいいと思います。

司会 実習にぜひ行つてみなさいという事です。

茅先 知つているのと知らないのでは選択の幅が違いますから、学生さんは、NOSAIにかかわらず、獣医師がどういうところで働けるのかというのをいま一度、見直してほしいと思います。やつてみたい、興味があるのであれば、ぜひ、実習なり、講習を受けてもらえればいいのかと思います。

私自身としては、すごくやりたかつた仕事を棚ぼたのようにやらせていただいているので。ありていに言えば、夫の給料で我が家は暮らしているけれども、私は仕事を続けさせていたでいる。ほぼ私のエゴと趣味でやらせてもらつてると最初は思つていたのですが、きちつと受け入れてもらつて、私も続けていける。女性も男性も含めて、現職の獣医師が今ここをき

ちっと守っている。この先も若い人たちが入ってきて「続けていきたい、やりたい」という意欲を持って選んでいただけるような、そういう職場にしたいのも私たちの使命だと思います。

学生たちをがっかりさせないような業界にしていく所存ですので、ぜひ目指していただきたいし、同じように働いている現職の方々に、ともに頑張ろうというエールを送りたいと思っています。

余談ですが、私は「産業動物に興味のある女性の会」(畜ガールズ)という団体の北海道地区のブロック長をやらせていただいています。宮崎大学の獣医師の方々が中心になって発足して、今年から本格的に始動しています。「臨床獣医」誌への投稿がでてきましたし、NOSAI兵庫では笹倉春美先生、ちばNOSAI連では溝本朋子先生などもブロック長で参加していただいています。来年のWBC(世界牛病学会)

に向けて、何かアクションを起こそうという計画もあります。この業界で、女性と男性が心地よく仕事をやっていけるという取り組みを、全国7カ所にブロック長を置いて活動を始めているところでは、ぜひ、ホームページをのぞいてみて、興味のある方は参加していただきたいと思っています。

司会 皆さんのメッセージは非常に説得力があるので、学生の皆さん、あるいは実際に働いている若手獣医師に必ず伝わると 생각합니다。何よりきょうお集まりいただいた先生方が、何年かあとに地域や、日本のNOSAIを引っ張っていくような人材になられるように引き続き努力をされて、今やりたいことが実現できるようになればいいと思います。

診療業務というのは、大きな責任もあり、非常に大変だと思います。農家さんは治してくださいと依頼してくるので、それに応えたい。そのためには

ちゃんとした技術と知識が必要です。

時には獣医学的な知識だけでは足りないのかもしれない。周辺の知識も絶対に必要な。それからコミュニケーション能力と言いますか、農家さんとの意思の疎通は十分にやるのが大切です。特に大動物の診療をする獣医師には大切だと思います。「かゆいところに手が届く」「農家の利益を少しでも上げる」「育ててもらった地域への恩返し」——きょうお集まりいただいた先生方からは、獣医療はもろもろのこと、農家に、地域社会により積極的に関わっていくという姿勢を伺いました。獣医師を含め、NOSAIに係わる人たちが、今以上に農家に寄り添っていくことで、農業が元気になるのではないのでしょうか。診療の現場の笑顔が農家の笑顔につながることを期待して、座談会を閉じさせていただきますと思います。本日はどうもありがとうございました。